

馬奈木昭雄弁護士オーラル・ヒストリー (二) 廃棄物問題

土 肥 勲 嗣

解 題

オーラル・ヒストリーは誰の言葉を記録するのか。御厨貴は、かつて、リンカーンの言葉をヒントに、「公人の、専門家による、万人のための口述記録」と定義した(御厨貴『オーラル・ヒストリー』中央公論新社、二〇〇二年、五頁)。「公人」とは多様な意味があるようだが、とりわけ公職に就いた政治家と官僚のオーラル・ヒストリーが数多く実施されている。確かに、政策形成の中心となった元首相やキャリア官僚の話の記録することは、公文書では明らかにならない実際の政策過程を理解する上で有意義な研究といえるのかもしれない。他方で、その政策の影響を受ける当事者の声、その政策を変えようとする人々の言葉はどのように記録されるのだろうか。

弁護士法第一条は、「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命」とし、「誠実にその職務を行い、社会秩序の維持及び法律制度の改善に努力しなければならない」と定めている。半世紀にわたって活動されてきた馬奈木弁護士のお話からは、深刻な被害を受けた当事者から見えた

その政策の実像と、その政策を変えるための知見を学ぶことができるのではないだろうか。

さて、今回のテーマは廃棄物問題である。大量消費の帰結として大量ゴミが発生する。ゴミ戦争といわれた一九九〇年代、馬奈木弁護士は廃棄物問題に取り組まれた。「弁護士としての取り組みでは一番面白かった時代」の話である。水俣病も廃棄物が原因となって発生した。原発も廃棄物処理の問題を抱えている。いままさにプラスチックの処理が問題となっている。本稿では、馬奈木弁護士の廃棄物問題のモノの見方を読み解くことができるであろう。

オーラル・ヒストリーの収録は今回も久留米第一法律事務所において実施した(二〇一九年十一月一日、同年十二月二日、二〇二〇年四月七日、同年六月一九日)。馬奈木弁護士には、長時間お付き合いいただいただけでなく、原稿に目を通して、加除修正を施していただいた。古田順子さんは、原稿の入力作業など、ご協力をいただいた。心より感謝申し上げます。

ゴミ戦争

産業廃棄物（以下、産廃）が全国的に問題になるのは一九九〇年代に入ってからですね。ゴミ戦争といわれていた。全国各地で問題になった。産廃処理の考え方は最終処分場と焼却施設の両方あって、埋めて捨てるという考え方と燃やしてしまうという考え方がある。最初は埋めて捨てるでやっていたわけですね。それも特別な処理はいらないという考え方である。安定型処分場といえます。一定の処理が必要だというのは管理型の処分場です。捨てられるゴミがそもそも危険だから外部に漏らしてはならない、密閉してしまう遮断型ですね。捨てるといった場合、この三つの処理の仕方がある。原発の放射性物質の場合は本来遮断型に捨てるのだと考えますが、とうてい対応できません。捨てる場所も、捨てる方法も明らかにせずに原発稼働を続けるおかしさのつけが今問われています。

福岡でいうと筑豊に次々と産廃処理場ができる。炭鉱跡地にバンバン捨てた。もうひとつは山林経営がぶれて、山の土地が処理のしようがないといえますか。だからそこを産廃業者が目を付けたわけですね。山林経営の放棄地の山間を買い叩いた。日本中の山が産廃処理地の候補になった。それも安定型の処分場です。福岡でいえば八女の矢部、上陽、星野、立花。山はみんな産廃処分場の捨て場になったわけですね。

法律の建前からいうと、日本政府のものの言い方からする

と、安定型処分場に捨てていいのは、安定して変化しない安定五品目です。まったく変化しないからそのまま捨てていい。処分場というのは捨てたゴミそのものが流れだすのを防止する。捨て場としてきちんと保全できればいいという考え方でですね。ゴミそのものには何の危険性もない。だからそのままバンバン捨てていいということです。ところが実態は、変化しないはずのところから真つ黒な廃液が流れる、逆に真つ白な廃液が流れる。一番激しいのは処分場で火が出て燃え出す、という騒ぎが日本中で起きた。

『法学セミナー』が一九九七年に「水源地にひろがるゴミ戦争」という特集を組んでいる（第四二巻第七号）。全国的で話題になったのが御嵩町、一九九一年ですね。さらにその前に東京の日の出町がもっと話題になった。大変な騒ぎになったのは、目の前で汚い実体が見えるからですね。しかも全国一斉だった。もうひとつは、業者のお行儀の悪さですね。零細業者であると同時に、安定型の処分場は暴力団の資金源になった。資金がいらないでしょう。空き地を買い叩いて、そこにゴミをボンボン捨てればいいわけですから。

私が最初に取り組んだのが一九九二年の上陽町ですね。公害問題は、まず四大公害訴訟で勝って、大阪空港訴訟で差止めを道を開いたわけですね。たとえば水俣病第一陣の勝訴判決の判例時報の解説には、「被害がでてからではもう遅い。公害被害を止めるためには事前の差止めしかない。ところが立法が整っていない」という指摘がある。判決を書いた齋藤

次郎さんが自分で書いたというのが定説ですけど、これは原告のわれわれが主張したことです。損害賠償から差止めへと流れになったわけですね。差止めを求める大きな流れを受けて、大阪空港で午後八時以降に飛行機が飛ぶのを差止める。大阪高裁でいったん勝って、最高裁で敗れるわけですけど、とにかく中心課題は差止め訴訟に移ったわけです。差止め訴訟で勝った事例が出だしたのが、私を取り組んだ牛深のし尿処理場。そのほかにもある。そのあと勝つのが大勢になったのが産廃処分場です。

宮城県丸森町

産廃処分場の差止が勝つようになったリーディングケースが一九九二年二月の仙台地裁、宮城県丸森町の事件です。いま丸森町は水害に遭っている（二〇一九年一月現在）。ここで差止めの仮処分を初めてとった。

裁判の流れは、最初に先頭をきった先人がどういう裁判をするかである意味運命が決まる。負けるとなると、ずっとそれで負ける。勝つとなるとずっと勝つ。丸森町で住民側の増田隆男弁護士が優秀だった。同時に協力した専門学者、京都大学防災研究所の中川鮮先生がすごかった。中川先生は私も一緒に取り組みました。

法律の専門家にはいろいろな意見があるでしょうが、私の意見では差止め訴訟で勝つ要件は二つだけです。ひとつは生

命身体健康に被害が及ぶことを立証すること。もうひとつは現地で実際に止めていること。この二つの要件を満たさないと差止め訴訟は勝たないというのがわたしの意見です。これは極めて正しいと思います。いままで勝った事件はみんな二つの要件を満たしている。逆にこの要件を満たさない訴訟は勝てない。牛深し尿処理場で勝ったのもそうです。し尿処理場が危ないという立証ができていた。

丸森町をやった増田弁護士と中川先生が具体的な事実提示を実行したすばらしさなんです。つまらない理屈を捏ね回さなかった。ひたすら現場の状況を、それこそで稼いだわけですね。徹底して産廃処分場の捨て場の実態が安定五品目しか捨てないなんてちゃんちゃらおかしいという事実を明らかにしたわけですね。各地の処分場の資料がそろっている。

われわれは九州廃棄物問題研究会という弁護士の勉強会をつくって、徹底して反対する。「処分場はひとつもつくらせない」というスローガンで取り組んだわけです。山鹿の処分場反対訴訟に結集したとき、「丸森町の産廃処分場を止めた仮処分の判決を守り抜く」というのがわれわれの合言葉だった。見事に守り抜いたと思います。何でも捨てているから危ないに決まっているわけですけど、安定型処分場というだけで危ないというところまで追い込んだ。だから日弁連は、「安定型処分場は許可すべきではない、法改正すべきだ」という意見書まであげています。

山鹿で裁判をするときは、丸森の判決を守るというスロー

ガンと同時に、丸森町の裁判の資料を全部もらってきました。行ってコピーさせてもらう。「全国各地でこうなっています」と、その資料を裁判に全部出した。全国状況に詳しいのは中川先生で、現地の住民運動、裁判の仕方から証人尋問の仕方まで意見を言っていた。専門は地質です。先生は大雨のために、お年寄りの施設が土砂崩れに遭って、死傷者がでた事件で「危ないということが予見できた」と原告側について証言した。土木学会の最高権威が国側についていたがその証言を破って見事に勝った。この人は勝てるんですよ。喧嘩の仕方がわかってるから。いらん理屈はいわずにとにかく危ないという事実をひたすら提示した。この正しさですね。

文字通り足で稼ぐ、具体的事実で勝つというのは、四大公害裁判の原点ですけどね。イタイイタイ病の弁護士団が唱えて、われわれ水俣がそれを受け継いだ。それを文字通り産廃でやってみせた。これが産廃のリーディングケースになった。だから産廃で勝つのが当たり前になった。とにかく安定型は危ないといって勝った。

管理型処分場

問題は管理型です。管理型は、有害物質を含んでいて危ないから、そのまま処理しない排水を流してはならない。もちろん廃棄物自体が外に漏れてはならない。問題は廃棄物に触れた水が未処理のまま外に出てはならないというルールで

すね。原発も同じ論理になる。福島では汚染水进行处理できないまま、海に放流しようとしている。とんでもないことです。そのルールを守っているかどうかという争いになるわけですね。守っているかどうかを判断する国の基準がある。その基準を実行すれば守っているというのが、国、県、業者も全部同じ理屈です。われわれは、「いや、それを守っているということ証明できていないよ」、「それを守っているからといって流していないことにはならないよ」という主張です。こういう風にしなさいという国の設置の基準、構造の基準がある。その通りの基準にしたから大丈夫だというけど、われわれは、その構造にしたからといって漏れないことにはならないよと主張した。

漏れないようにする基本はシートを敷く。「シートをきちんと敷いている。だからもれない」というわけですね。最初の議論はシートが破れるかどうかという議論です。日の出町の時代は、鉛筆の芯、先の尖ったもので突いたら破れる。鳥が突いたら破いたという有名な話がある。それくらい脆い。それはそうだということになって、それから厚いゴムシートになる。ゴムシートだって破れるから最後はとうとう五層の構造になった。シート自体は三層です。三層のシート間に遮断する二層がはいっている。それで五層になる。五層シートの間に緩衝材がはいっている。それはもろさない緩衝材です。普通に言われているのは、広い処分場に一枚で引くわけにはいかない。必ずつなぎがないといけない。そのつなぎ目が破れる。

中川先生の話は極めて明快です。モノの考え方がむちゃくちゃ面白い。処分場では山の谷間にシートを敷く。水が流れ込むように中央に排水管が必ずある。ゴミは排水管の上にも積まれる。排水管の上の部分とそれ以外のところではかかる圧力が違う。一枚のシートの引つ張る力が排水管があるところないところの圧力が異なることによって管の周辺が破れる。有名な話で関西空港は現在でもそれがドンドン沈んでいる。造ってから一メートル以上沈んでいます。全体として問題にならないのは、同じ程度に平らに沈むからです。建物の構造物としては傾いて沈んでいない。だからいけないのは沈下そのものではなく、不等沈下、あるいは不同沈下。要するに同じでない沈下がいけないわけです。同じように沈下するのならいい。ところがゴミが同じでも沈み方が違ってくる、そこが破れるに決まっている。五層シートでもです。だから処分場の構造上そうになっているから必ず破れる。中川理論のすばらしいところですね。尖ったもので押さなくても、不同沈下によって破れます。絶対に避けることができない。

環境ホルモン

次の問題の方がわたしはより重要だと思っています。いまのは構造上漏れるという話です。今度はゴミに触れた水が流されるとき、処理した水が実は安全には処理されていないということです。これが鹿屋の処分場の判決です。その理屈は

ふたつある。

ひとつは「処理した水は安全です」というけど、その意味は国の排水基準値を満たした水が流れている。クリアしている。水俣病もそうでしたよね。国の基準値はクリアしていたよね。だけど有機水銀は規制をかけていなかった。規制をかけていない物質が流れる。「規制をかけた物質が基準値内で流れている」といったってダメなんです。規制をかけていない危険物質がある。われわれが正面から打ち出したのがダイオキシン、ようするに環境ホルモンです。われわれは環境ホルモンの危険性を正面から掲げてたかった。これが大成功した。一九九〇年代から二〇〇〇年にかけて環境ホルモンが一番問題になっていた。特に九州ではカネミ油症です。ダイオキシンによる被害と認められました。裁判所も特にダイオキシンはという議論になった。「ダイオキシンがでているよ」、「規制をかけていないじゃないか」という議論です。

もうひとつの議論が、そもそも安全、安全でないという量の問題があった。毒劇物法が規制する法律の根幹です。毒劇物法の規制の基準値の単位はミリグラムです。ミリグラムの単位で考えるときは危険のものの考え方は二十四時間、四十八時間で発病する値です。百匹のマウスのうちの半数が二十四時間、あるいは四十八時間で死ぬ量なんです。これは単位がミリグラムなんです。同じ考え方で基準値が変わったのが水俣病です。水俣病はPPMで議論するでしょう。PPM百万分の一ではマイクログラムです。PPMというのは

パーセント。同じ単位なんですけど。一グラムの千分の一。単位は必ず十の三乗になります。ミリグラムは千分の一。マイクロというのは百万分の一。その次の量がナノで十億分の一。そしてついにわれわれの議論はピコまでいった。一兆分の一。十の三乗、六乗、九乗、十二乗まできた。

荒っぽくいうと水俣病もミリからマイクロ、PPMまでいったのは、慢性水俣病の場合、原因物質が微量で長期に汚染されて蓄積したからです。一回一回の排水量は問題にならない量なんだけど、それが長期にわたって蓄積する。水俣病の場合は食物連鎖によって濃縮する。濃縮し、かつ蓄積することによって排水では危険ではないと考えた量が人体に届くときには危険量に達するというのが水俣病なんです。それでミリからマイクロに危険物の単位が変わったわけですね。

それがなぜ現在ナノにいくのかという今度は環境ホルモンの議論になる。これまでは発病には一定の量があるというもの、の考え方なんです。人体への影響が一定の量までないと発病しない。これを閾値^{いきち}といいます。発病する量ですね。水俣病でも汚染量と症状の関係で、汚染量が増えるところとところで発病する。汚染量が体内に取り込んだ量マイナス排出量、これが蓄積量で、その量が一定の量にまで達した時発病するというのが日本政府の説明です。わたしは嘘だという。出て行った量を単純に引いたらいけない。体のなかを通つたのは悪さをして出ていっている。単純に引き算をしたらいけない。わたしの意見は積分した量だと思っています。

環境ホルモンの危険性はシングルヒットというものの考え方なんです。汚染量と症状の関係が単純な直線ではない。閾値があるという考え方は一星ベースにいつて、二星ベースにいつても、まだ三星ベース、ホームイン（すなわち発病）するまでには余裕がある。日本政府は、ダイオキシンは二星ベースを周ったあたりだといっていました。発病する量にはならない。日本政府の考え方だが入った量と排出量を引き算しますから、一生取り続けていてもその範囲内だったら発病しないという。発病しないとわかつていても毎日毎日、有害とわかつているものを体内に取り込む人がどこにいるのか、と私は思います。日本政府は「発病しません。一生大丈夫です」といつてもそれが本当であつても私はお断りします。

環境ホルモンの問題はこの国の考え方は決定的に間違いだとかきつめた。環境ホルモンとは、人間のホルモン物質の作用をかく乱する物質です。たとえ話でウグイスとカッコウの話がある。カッコウが卵をよそのウグイスの巣に産み付ける。その卵は先に孵るようにつくられている。一日先に孵化して、自分が生き残るために、ウグイスの卵を巣から落とす。馬鹿力を一定時間だけ働くというホルモン作用をもっている。その力を発揮できる限定された時間がある。その時間内にそのホルモン作用を攪乱する物質が入ったら、蓄積濃縮という概念はいらず、極めて微量でもただちに影響が及んでしまう。遠くに嫁に行った娘さんが産廃処分場の近くの実家に帰って一週間だけ羽を伸ばして帰った。産廃処分場の影響はその

一週間だけです。ところがたまたま妊娠していた。たまたま手足が成長する時期にそれを阻害する環境ホルモンの物質がきたら、手足が成長発達しない。一番わかりやすいのがベトちゃんドクちゃんです。ちょうどその時期に成長するホルモンを阻害する物質が微量入った。

これが環境ホルモンの恐ろしいところです。閾値がない。それをシングルヒットと俗にいうわけです。いままでは蓄積濃縮して本塁まで帰らないと得点がいらないのが、一塁に出ただけで得点になる(すなわち発症する)ルール。まったく新しいルールでわれわれは危険性に直面している。体内のホルモンバランスを乱す量でいい。めちゃくちゃ微量でいい。それでナノまできた。十億分の一の量でも危ない。環境ホルモンとして働く物質がまだその多くが特定できていない。ダイオキシンとか、いま百近く特定できていますけどね。まだまだわたしたちが知らない未知の物質がたくさんあります。不幸なのが、この頃、環境ホルモンという話を全然聞かない。一九七〇年代、四大公害裁判を始めたころは、カーソンの『沈黙の春』が問題を指摘した本でした。『沈黙の春』は、有機化学物質、とりわけ塩素を使った物質によって生物がみんな死んでしまう。卵は孵らず、春に鳥がさえずらない。それで『沈黙の春』、有機化学物質の恐ろしさ、とりわけ塩素化合物の恐ろしさを警告した本です。

ところがその二〇年後『奪われし未来』という本になるわけですね。これが環境ホルモンです。環境ホルモンによって

わたしたちの子どもの未来が奪われた。ちょうど二〇年の間に危険性がそこまできた。その本の序文をゴアが書く。これが大統領候補です。大統領選でたたかってブッシュに敗れる。ゴアは環境ホルモンを徹底して規制するという姿勢を打ち出していた。勝ったブッシュ側はそんなこと大嫌いなひとたちのグループでしたので、環境ホルモンの話はどつかに吹っ飛んだ。大統領が先導するような環境ホルモンの研究はなくなつた。

しかし、危険なものは危険に決まっている。環境ホルモンは廃棄物の裁判では裁判所が私達の主張にわりとのとてきた。だからわれわれは安定型から管理型の処理場の差止まで勝ち続けたわけです。敗れるようになったのが、行儀の悪い業者から自治体に移ったからです。自治体に移ったらわれわれの主張はもとにも検討してもらえず、行政の裁量権があるという議論にすり替えられてしまった。久留米市にも簡単に負ける。裁量権があるからという理由で危険性の判断をまともにもせず負ける。

もうひとつは、焼却施設です。焼却施設は危険な排出量が微量も微量ですね。まだ希釈理論が生きているわけです。水俣病の裁判のときも希釈理論、水処理というのは薄めればいい、閾値があるという考え方でした。閾値以下にすれば発病しない。閾値以下にしても蓄積濃縮すると閾値に達するというのが水俣病です。そもそも閾値がないのが環境ホルモンです。単位をミリからマイクロ百万分の一、そして十億分の一

にいくわけです。しかし危険な量が十億分の一（ナノ）にいても大気汚染は違う。「大気だから希釈されるから、危険量にはならないだろう」という。これが突破できないわけです。

規制の単位

日弁連がダイオキシンを規制すべきだという意見書を出した時に、日本政府は「ダイオキシンは危なくありません」といった。それから一年ほどで規制し始めた。それが排出されるところでダイオキシンを八〇ナノで規制しました。環境ホルモンだから単位はナノです。あつという間の一年、二年で規制を厳しくします。その後いくらになったと思いますか。〇・四ナノです。すごいでしょう。ダイオキシンの規制値は外にでるときには〇・四ナノだった。

久留米市の八丁島の焼却施設がその基準を超えたことがみつかった。いつも超えているに決まっていると思っています。しかし、年に一回測ればいいというおかしな法律で、常時測れば超えているのに決まっているのに、計測するときだけ規制値を超えないように操業する。計測するときだけ危ないものを燃やさなければいい。絶対安全に決まっているものだけを燃やせばいい。普通であれば計測で超えることはありえない。しかし、この前超えた。なぜばれたかというところから灰の方からばれた。灰はさすがに調べられますから。煙の方は煙突からでたら大気で無限に薄められてしまします。

松葉のダイオキシン量を測っているデータがあります。なぜ松葉かというと、すぐ入れ替わるから、最新の汚染のデータがでてくる。久留米も危ない。理屈をいうひとがいて「発生源は焼却施設とは限らないよね」といわれる。車のディーゼルエンジンです。もちろん「ほかに煙を出しているところいっぱいある、焼却施設のせいにされたらたまりません」という議論で、規制できない。

日本政府はせいぜいマイクロの単位でしか危険を考えません。それがなんで世界的にはピコになるのか。アメリカはピコです。ちなみにピコという単位は荒つぽく言うところ五〇メートルプールに目薬を一滴落とした程度の量です。マイクロ、ナノ、ピコでそれぞれ何を危険と考えるか危険性の概念が変わります。今度は発がん性でものを考える。十万人に一人発病する量だとナノの議論なんです。ピコの議論は百万分の一、百万人に一人が発病する量です。なんでピコという数字を議論することになったのかというと、有名な実験があつて、ダイオキシンを赤毛サルに投与したわけです。それがガンになる確率が上がった。ガンの発病率が百万分の一を超える量がピコです。だからアメリカはピコの単位で規制します。

廃棄物の議論ではナノの単位で考えるのは常識です。廃棄物以外でその議論をしようとすると急にとんでもないことになる。われわれがまずやったのが電磁波です。単位が排水と電磁波では基本から違うという専門家の議論になるけど、考え方は同じだとわたしは思っている。危険性をミリで考える

か、マイクロで考えるか、ナノで考えるか。いまミリの単位で議論されている話題の物質は何だかわかりますか。原発の放射性物質です。現場で働く労働者が即座に発病する量です。電磁波ではミリで議論するのはとてもない、ばかばかしい危険極まりない話なのです。外国ではさすがにマイクロで議論します。ミリでは議論しません。ところが日本の電磁波の基準値(たとえば電子レンジ)が一〇〇〇マイクロです。すなわち一ミリなんです。電磁波というのは放射性物質と同じですからね。だからミリで議論して労働者の安全の規制値が二〇ミリというのは根本的におかしい。とてもでなく危険だと思います。

規制値のものの考え方は誰に対して適用するのかという問題でもある。福島事故があつてすぐに食料品の規制値が外国と比べると日本の方が緩くなった。御用学者がテレビで思わず言ってしまった。「チェルノブイリは事故直後はもっと緩かったですよ。規制できるようになったから今の、より厳しい水準になったんですよ」。思わず本音がでた。極めて正しい国や業者の本音だと思います。安全かどうかではない。外国のその数値だったらいま福島では適応できない、やれない。チェルノブイリはいまやれるところまできた。私達は「基準値は厳しくなる一方で緩くなった例なんかないだろう、だからいまの基準値が安全とはいえない」とずっと言ってきました。ところが福島事故で初めて労働者の規制を緩くした。本当に安全性ではなく必要に応じて。そうしないと働けない

からです。従来の基準値だと現場でやっているひとみんなひつかかってくる。緩めないと仕事ができない。食料品もみんなひつかかる。そこでチェルノブイリよりはるかに緩い数字です。

御用学者だからある意味で正確にものをいっている。「ただちには発病しません」と。そうなんです。ミリというのはそういう単位なんです。ミリというのはただちに発病する量なんです。十年後二十年後発病するというのがマイクロです。環境ホルモンなどに染色体異常をきたす量がナノ、発ガンまで考えたらピコです。放射性物質であるのが、電磁波であるのが、毒物であるのが、単位はみんな同じ考え方です、というのが私の意見です。事態にそくした意見です。廃棄物をめぐっての論争の大きなものの考え方ですね。

未知の危険物質

九州廃棄物問題研究会は、基本は水俣病の弁護団ですから、水俣病のものの考え方が徹底している。それで組み立てたのでいままでも勝ち続けてきた。いままでも原発をやってきた弁護士たちは原発の専門家なもんだから、ものの考え方が技術者と同じ考え方をする方が多いようです。同じものの考え方をするからそれを疑問に思わない。われわれは二七科学論争、技術論争を否定する立場で出発していますから。

廃棄物問題もゴミ弁連というのがありますが、同じ産廃

処分場の危険性も、構造上漏れる方にアクセントがあつて、「処理できないでしょう、特に環境ホルモンはだだあ流れだよね」とわたしがいふほどには、あんまり強く主張されない。わたしは「むしろ処理した放流水の方が問題なんですよ」。未処理で流れるのはいわばアクシデントで例外的に流れる量です。放流水は流れている方が正常の量でしょうから、毎日流れている方に含まれている毒が危ないでしょう」といふのがわたしの意見です。鹿屋の裁判は裁判所がそうだと、「基準値内に処理している保証はない」といつて、われわれが勝つんですよ。放流水は処理できない。技術的にもそうなんです。廃水処理は基本は薄めるという考え方です。薄めてもダメだ。物質自体を違う危険ではない形に変えないといけないわけですね。その物質を違う物質に変えるということは化学的にはその物質が特定されているということなんです。特定されていない、未知の危険物質に対してはまったく手が打たれていないよね。

未知の危険物質がそんなにあるわけではないといままで毒劇物法で考えてきたわけですけど、われわれが問題提起したのが有機化合物の危険性です。つまり自然界に存在しなかった、人間が造りだした毒物です。生命体が地球に誕生して以来三十五億年以上営々として毒とたたかい続けてきた防御体がある。自然界に存在する毒については抵抗力を持っている。個体というとき最も脳を守らないといけない。種というときと胎児を守らないといけない。だから関門をつくった。脳関

門と胎盤で毒がいかないようにする。三十五億年以上かかって営々として防衛機能をつくりあげてきた。ところが水俣病もカネミ油症もどちらもその防衛機能をやすやすと突破した。脳がおかされ、かつ胎児がおかされた。なぜかという生物体が毒と思っていないから。生物体が知らない毒物、人間が造り出した毒だから、防衛機能は働かない。新しい怖さだと思います。

電磁波裁判

わたしの友達が九大の教授をしていた。磁石を使った実験をやっている。強力な磁場をつくるそうです。私が「ピップエレキバンはものすごくよく効くよ」といつたら、「そりゃ、効くくさ。自然界の何百万倍の磁力は効くに決まっている。逆に効くということはいろんな影響を与えている。いい影響しか考えてないかもしれないけど、悪い影響も一緒に与えている」と。有名な話で、伝書鳩が飛べなくなった、自分の位置のバランスがとれなくて巢に帰れなくなるのは電磁波の影響だと言われています。自然界の何百万倍の電磁波を浴びていいわけがない。自分たちは実験をするときには厳重に完全に防御して近くに寄らない。電磁波って怖いんだよ。その話を聞いてからは電磁波は危ないと信じるようになった。やっている専門家がそういつている。

電磁波の裁判をやると、「電磁波は影響ない」と業界の専

門家はいうけど、電磁波の機器を医薬品として有効だと認めている商品がある。いい影響だけを認めて悪い影響を認めない、そんな都合がいいことがあるのか。影響があるということは何よりの証拠じゃないですかと裁判所にいうんだけど。理屈からいえばそうに決まっている。危険性のものの考え方の基本です。廃棄物では裁判所がのってきた。電磁波ではなんで危険だという考え方にのらないのか。ましていわずやもつと危険に決まっている原発でなんなのらないか。いみじくも裁判所が判決でいつているのが正しいと思います。社会通念という言葉です。

電磁波が危ないという世界中の研究論文が集められている報告書がある。EUで専門家が十人ばかり集まってそれぞれの専門分野の信用できる論文だけを精査して一冊の報告書にした。この内容がすさまじい。危ないに決まっているとすぐ理解できます。EUは面白いですね。EU議会がこの報告をとりあげた。子供の携帯電話の使用を禁止した。日本では子供には安全のために持たせている。同じ資料をわれわれも当然ながら裁判所に提出する。EUでは議会で正しいと、警告を出して規制すべきだと決議をした。フランスの裁判所で携帯電話の大きな会社の中継塔の移転と損害賠償を求めた訴訟を起こした。その裁判は一番で勝ち、ベルサイユの高等裁判所でも勝った。

われわれが裁判所に準備書面をしつかり書いて正面から問いかけた。同じ資料を使って、同じ議論をしている。そして

業者は同じ反論をしている。フランスの訴訟で住民側もこの資料によって危ないと主張した。フランスの裁判所は危険性を認め中継塔の移転を命じた。損害賠償も命じた。日本の裁判所は何と答えたと思いますか。「日本とフランスは法制度が違いますから」。結論の違いは、そうではなく危ないと思うか思わないか。日本の裁判官は、同じ資料をみて、危ないと思わない。

裁判所の答えは、「私が思うか思わないかではない、社会通念で思うかどうか。」これが裁判官が本音でいいたいところですよ。社会一般で危ないと思っていないでしょう。フランスで勝てるのは、社会一般で危ないというところまで来ています。EU議会では危ないと思っています。日本の国会ではそうは思っていない、というのが本音で判決に書きたいところですよ。原発の判決では「社会通念」とはつきりそう書いた。事故が起きると社会では思っていない。

私達が社会通念で勝ったのは水俣病の三次訴訟の第二陣判決、国に責任があることは社会通念です、と言った。国に責任があるとみんな思っているよ。三次訴訟の第一陣は私達が主張したありとあらゆる法律で勝った。第二陣は国に責任があるに決まっている。社会通念はそうだといって勝った。

原発でも私達はそういったわけですよ。ところが川内原発で敗けた。社会通念で危ないと思われていないよといって負けた。逆に使われた。私達法律関係者は皆怒ったけど、裁判所から足元をみられているからしょうがないと私は受けとめ

ています。一番足元をみられたのは、仮処分をかけたとき、九電が仮処分の申請者に損害賠償の脅しを打ち返してきた。こんな恥ずかしいことがあるか。人の命がかかっているから申請者、原告に対し損害賠償の脅しをかけるなんてとんでもないと本格的に反撃しないといけない。しかしきちんと反撃できなかった。それで裁判所に完全になめられたと思っています。文句のいいようがないと思います。本当に危ないと思うんだつたらもつと日本中裁判が起きてもおかしくない。だから私はあなたが裁判所がとんでもない判断をしたとは思っていない。樋口元裁判官の講演はわたしと同じ結論だと思えますよ。退職後、日本中で講演して回って危険性を説いておられるのは立派ですよ。

社会的な妥協値

産廃では危険性の考え方を貫くのに成功してある程度止めてきた。ゴミ捨て場はほとんど止めてきた。ところが建設主体が自治体になって止めきれなくなった。ひとつは裁量権の問題です。

久留米市の処分場をわれわれが危ないというとしはすぐに金を使って被害の防止対策措置を増設する。不等沈下を防ぐ、つなぎ目が危ないという、高良内の処分場はコンクリート五〇センチを底に敷き詰めて、その上にシートを敷いた。少々不等沈下しても大丈夫でしょう。これで文句なからうとしは

言う。しかし斜面も明らかに断層があるのですよ。「あそこ崩れるぞ」といったらむつちやくちやにコンクリートを放り込んで、ワイヤーで固めた。これで事故を起こしませんもんね。だから自治体相手だと勝たない。企業だとそんなにお金をかけてられない。だから高良内処分場は建設予算が大幅に増加した。問題点を指摘するたびに対応してくる。安全運用を確保したのはいいが、無駄な市の予算をいっぱい使った。管理型の処分場であれわれが敗れた例です。最終処分場は自治体には勝てない。一方焼却施設はもう最初から問答無用で勝てない。私達は五つ裁判して全敗です。

二〇〇〇年にドイツの環境大臣がきて日弁連で講演をした。ドイツ全国で焼却施設が十か所位ある。ドイツではたき火しても罰金です。二〇一〇年までに焼却施設はゼロにしますといったので日弁連講堂がじよめいた。しかし、ゼロになっていません。原発をつくらない代わりに焼却施設を認めたと言われています。

日本で焼却施設に取り組んだ産業は何か。斜陽産業で、つぶれるところを、ほとんど補助金を使った救済事業です。まず最初が造船業、船の炉です。造船会社がみんなで焼却施設に乗り出しました。ところがダイオキシン騒ぎになります。船の炉はそんなに高い温度にする必要がない、蒸気がつくればいいので、むちやくちや高い温度にする必要がない。せいぜい八〇〇度の炉です。ところがダイオキシンを防ぐためには一〇〇〇度を超えないといけない。造船の炉ではだめ

だ。船の炉では使い物にならない。もっと高い一二〇〇度から一三〇〇度の温度の炉がだせるのは、何か。しかも斜陽産業。製鉄です。いまの焼却施設は製鉄の溶鉱炉の技術です。

国はダイオキシンは安全だと認めて日弁連と喧嘩して、その一年後、二年後に危険だといって、文部省が全国の小中学校に一斉に焼却炉使用禁止の通達を出した。全国に一斉に通達を出したというのはいかに危ないと思っただけです。私の家の目の前が中学校なんですよ。裏門を入ってすぐのところ、小々な焼却炉があつて燃やしているから、怒って校長のところに電話したんですよ。「なんで燃やしている」、そして「別に構わんでしょ」って、大喧嘩したんですよ。危ないと思っていない。そういう調子ですよ。それこそ社会通念です。ダイオキシンがいかに危ないかと日本政府が思っているという証拠として日本中からそれまであった小型の炉が姿を消しました。本当に危なかったんですよ。

製鉄所の君津工場の溶鉱炉が完成してすばらしいとNHKが特集した。そのときに排出されるダイオキシンが二七ナノ程度。規制値は八〇ナノの時代ですから、すばらしいですよ。最新鋭ですから。ところが規制値が変わって既製の炉は一ナノまで認める。新設炉は〇・四ナノまで落とさないとイケないということになった。そうすると二七ナノなんてとんでもない危ない炉なんですよ。これも現在決められている規制値を守れば安全だということがいかにバカバカしい代表例です。いままで規制値は安全値だ、最新鋭の炉といってい

たのが急にダメになる。論理的に説明しようとすれば、日本人がダイオキシンに対する耐性を失った、急に耐えられなくなった。あるいは毒性が急激に増えたという説明しかできない。そんな説明はバカバカしい。

いままで安全値だと言っていたのがウソだった。安全値だといつてはならない。これは社会的な妥協値です。危険物質を出す側と被害を受ける出される側が社会的に妥協した値である。社会がこれでしょうがないと妥協した値であつて、けつして安全値ではない。いまの判決は、社会が決して合意していない、政府の一方的規制値でいいという説明だと思えます。正面からいわれれば「まちがっているけどしょうがないよね」といわざるを得ないと思います。社会通念という裁判所に対して世論調査では七割が反対しているといつてもダメなんですよ。その七割ってなんですか。問われているのは、立憲主義、国民主権の大きなものの考え方だと思います。

証人尋問

産廃処分場建設反対運動の具体的なやり方については、われわれが編み出したものがある『自由法曹団物語』。韓国と日本の公害に取り組む弁護士の間シンポジウムで、わたしが九州産業廃棄物研究会はこう闘うという報告をした。それを踏まえて近藤忠孝弁護士が報告書の冒頭でこのように書いている。議論が噛み合っていることを実感させられたのは、

馬奈木弁護士の「わたしは法律家ではないからという立場からの発言です。現行の法律をあらゆる面から駆使して公害闘争を勝利するためには、弁護士が法律家でなくなる必要がある」という問題提起です。」（『日韓公害問題シンポジウム（冊子）』）。近藤先生が正しく言っている。廃棄物問題をどういう風にたたかうのかという問題提起です。

ポイントはいふところある。実践的には反対運動のやり方です。業者に徹底的に質問する。危ないよという事実を明らかにするために、業者の事業説明会を住民の質問会にかえてしまふ。そのやり方のテクニクです。もうひとつは安全性のもののかえ方です。何を危険と思うのか。私達は廃棄物問題で勝ってきた。鹿屋では裁判で勝った。『判例タイムズ』の二〇〇一年の正月号、二十一世紀冒頭から取り上げられた。

一番のポイントは排水を処理したって危ない。処理しようと思ったら「この物質」と特定しないといけない。「この物質のこの量」の処理に対しては「この物質のこの量」の薬品を処方しないといけない。多すぎたらかえっていけない。物質を特定させて、それに対する薬品を加えて違う物質に変えないといけない。しかし、量が異なれば安全な別の物質にならない。だから極めて難しい。極めて難しいことを、日常やれといわれてもやれるわけじゃないでしょうが、というのがわれわれの指摘です。裁判所もそうだと。相手方証人として技術者がでてきたので相当追及した。技術者もそうだと言わざるをえないですね。

売る側は魔法の薬で全部処理できるというから嘘だろう。全部処理できるわけがない。この薬でこの物質が処理できまうとしかいへんはずだ。それと適量をどれだけ入れたらいいのか。その薬を売っている会社の説明ですよ。「実際にやってみなさい。処理する液に入れてみて適量を決めてください」と書いてある。あらかじめ量がわかっていたらこの量といえるけど。あらかじめ確かめてからやらないといけない。運んできた廃棄物の搬入先ごとにやってもらわないと困る。「搬入先が決まっていますから毎回やる必要がない」というのが業者側の言い分です。それに対するわれわれの反論は、「製品検査は何のためにやるのですか」。毎日、同じものをつくっているから、同じものができているはずだから製品検査なんか必要ないじゃないですか。にもかかわらず製品検査をやらないといけない。できそこないがある。同じものができている証拠はない。廃棄物も毎日同じものが捨てられているとはいえない。入ってくる原料も同じところから入れているといっても量も微量に違っている。毎日同じものだって違っている。厳密にいうとそれを測らないと適量が決められないはずだ。未知の物質はおいても、わかっている物質でもそうですよ。製品検査は要らないのか。必要だというのなら廃棄物もいると。裁判所もそうだと認めた。

この技術者に対する私の反対尋問は成功した例です。安全な処理ができていないという理由で管理型処分場を本格的に止めた例だと思います。

シミュレーション

証人尋問が成功するかどうかは、組み立ての論理の明快さと同時に小道具を使わないといけないと思っています。小道具を適切に使いながら「あんたおかしいでしょう」と追い込む。準備作業として尋問の内容を何度も書き込み、書き込みしていく。だからアスリートの反復練習というのはとつてもよくわかる。頭の中でシミュレーションを何回も何回も繰り返して、前の日なんているのはそれを四、五回やるのですよ。こう言ったらこの道具で反論してと書き込みをずっとしていく。ところがある時その証人尋問が前日中止になった。一回流れたわけです。研ぎ澄まし、研ぎ澄ましぎりぎりまで準備をやっていたのに。ところが次回にその準備の書きつけが見つかからない。しょうがないからブツブツ言いながらまた最初から作った。研ぎ澄ました結果を思い出しながら。それに基づいてさらにシミュレーションを何回か繰り返し続けていたら前回用意した書きつけが偶然出てきた。比べてみたら前回の作業の成果をきちんと再現していた。きっちり同じものをつくっていた。進歩がないというべきなのか、研ぎ澄まして究極まで到達していたというべきなのか。

私が成功したと思っている尋問がある。ひとつは電磁波の裁判でN.T.T.の技術者から北大の教授になっている方の尋問をやった。この結果は運動団体が公開している。電磁波の問題を協力している技術者、先生方からはお褒めいただいてい

ます。この証人は「国の規制値は安全値です。これを守れば安全に決まっています」と強調した。私は「日本の規制値より、ケタ違いに厳しい規制をしている国がありますよ。その国の法廷で、日本の規制値を守れば安全と証言したらもの笑いになりませんか」と追及しました。本当は原発でその尋問をやりたいんだけど、気力、体力が落ちている。

水俣病では、答えを四つ予想して、さらにその答えを四つ、四つの答えを予想する、ということをやったと水俣病の弁護団の千場団長が書いてますけど。それをきっちりやるわけです。追い詰めることができるものだけを質問する。結局逃がしてしまうということになるとそれは尋問しない。逃がさない一番の方策は資料などの小道具があつて、この小道具を使えば逃げ道を塞げると。論理だけではどうしても水掛け論で逃げられますからね。まず、論理と事実がしっかりしてないといけないけど、その論理に従って追い込んだ袋小路でどめを刺す道具を用意する。その道具が用意できないのならもうしょうがない。逃げ切らせるのだったらしないほうがいい。それを何べんか繰り返し検討しながら研ぎ澄ますわけです。

急にその話をする気になったのは、テレビドラマ「ドクターX」の最後の回で自分が病気になるって最後の手術で倒れる。自分が手術できるなら自分の病気を切れるんだけど。ところがノートが残されている。それがシミュレーションなんです。こういう事態が起きた場合はどう対処するとずっとノートに

書いている。それでちゃんと他の人が対処できて、助かったわけですけど。手術だってそうだよ。予想外のことが起きるわけですから。予想外のことをどれだけ想定できるか。予想外のことに對してどう対処するのか。だから「私は失敗しないので」という名セリフは、それだけの対処をしていますよという裏返しの表現なんですよ。手術で開いてみて驚いていたら話にならない。全部想定範囲内で当然起こるという前提でないといけない。証人尋問もそうなんだと思います。

質問会

反対運動の質問会では司会を獲得する。司会を業者にやらせてはいけない。司会を獲得するテクニックはマイクを握って離さない。会場はだいたいこちが用意する公会堂ですから。施設はこちがわかっているわけです。マイクを絶対に渡さない。こちが全部持つておくとかね。高橋弁護士と一緒に自分たちが司会をする理由をまず議論して勝たないといけない。それはわれわれを納得させてほしい場だ。あなたが安全だというのであれば、われわれを納得させてほしい。あなたが説明するよりも、われわれがココを知りたいということを説明してくれないとわれわれは納得できないよ。あなたが言いたいことを言うのではなく、われわれが知りたいところを教えてほしいのだ。そのためにはわれわ

れが司会をしてわれわれが聞かないとわからないだろうが。われわれを納得させるためにこの集会をやっているのだよ。違うとはいえないですよ。あなたにはわれわれがどこを知りたいかわかるわけないだろうが。

質問事項で三〇頁ぐらいになる。それを反対運動の役員の皆さん方とみんなて共有するわけですね。水俣病の弁護団で尋問事項をひとつずつ議論していったのは、もちろんその尋問に成功するためでもあるんですけどね、弁護団と運動体みんなの意思統一になったわけですよ。だから弁護団がみんなて共通認識を得ることができた。わたしはチッソ水俣工場長の西田尋問で「その尋問をみんなて検討することによって初めて心をついにした、ひとつの弁護団運動体になった」という評価をしています。その経験があるもんだから、産廃反対のときも役員のみなさんとその尋問事項を一緒に考えてつくるわけですよ。すると共通認識になる。何が危ないのか。本当だよ。みんな本当に危ないよねと確信になる。共同作業をやらなくともだめなんですよ。高橋先生はその質問票をいくつも持っているのじゃないかな。それがここ『自由法曹団物語』に書いてある。

岡山県吉永町の反対運動

具体的にやった例で一番面白かったのが、岡山県の吉永町。この処分場は第三セクターだった。ようするに行政がかんだ

管理型最終処理場のゴミ捨て場ですね。岡山県知事が建設を不許可にした。われわれの反対運動が成功したからです。全国で県知事が不許可にした例が、その当時六、七かあったと思います。全部、業者側が行政不服審査で当時厚生省に不服申し立てをします。全部ひっくり返って業者側が勝つ。全国で不許可にした例で最終まで不許可を貫いた例はそれまでないと思いますよ。一番おかしいのが千葉の例だったと思います。知事が不許可にして不服審査でひっくり返って許可になって、住民の差し止め訴訟で勝って止まる。それも最高裁までいって止まる。わたしに言わせれば最高裁までいって止まるなんてばかばかしい。岡山県知事がやった不許可の判断を厚生省がひっくり返さなかった、たぶん私が知る限りでは唯一の例だと思いますよ。なんで唯一の例となったかはここに書いている通り、本当に安全かどうかを作文の審査ではない、住民と業者に討論をさせた実質的な危険性の結果によって判断したからです『たまたま続けるということ』。

設置許可の県の審査は「作文審査」とわたしはいつもいつている。「基準どおりやります」と書いてあればいい。本当にやれるかどうかなんて審査しないわけですよ。「国の基準どおりするように書いてありますね、設計図そうなっていますね。じゃあいいでしょう」。いまの原発の審査と一緒にです。「いや、本当に安全にできるかどうか審査をやってみてくださいよ。そのためには現地までみにきてよ」と、まず県にさしさん言つて、県知事がその結果不許可にした。厚生省にも

見にこいとさしさんいった。行政の立場では作文ができていいいいわけだから、理屈からいうと本来見に行く必要はない。あんまり何回も何回も、もう貸切バス三台とか四台で岡山から東京まで乗り付けて、銀座でピラマキして、たいがい激しくやりました。そうしたら厚生省の担当者が現地に来ることになった。当然、「絶対反対阻止するぞ」と横断幕で迎えると現地のみなさん思いますよね。それはダメだと。現地に見に来ないことが原則のひとたちが見に来るといふのは大変なことだ。「絶対反対阻止はいけません」。そうではなく「熱烈歓迎」の横断幕を駅前にはった。みんな日の丸の小旗もつて振った。駅から処分場までの沿道を全部うめました。これは町ぐるみの反対運動だからできるのです。

この問題で最高裁判例となっているのは利害関係者として、町、住民に原告適格があるという最高裁の判断になった。それまで原告適格はせいぜい五〇〇メートル範囲の住民とか、あるいは一番酷い例は処分場をつくる小字の住民。これは住民の立場からはとんでもない。われわれは影響があると考えるひと全部。影響がないならそのひとを却下すればいい話ですから。影響があると考えるひとは全部原告適格がある。少なくとも町はあるよ。住民団体はあるよと。そうだと最高裁がいった。それが最高裁判例です。

この時の新聞の写真がありますけど、厚生省の役人が現地に行って地図をみている。現地をみているわけではない。わたしが後ろからああでもないこうでもないと言っている。

役人は関係者をまわってわれわれの会場に最後にきて、「一言も発言しませんからね。みなさんの話を聞くだけです」としつこく言ったんですよ。「結構です。聞いてもらうために来てもらったんで、何もおっしゃらなくて結構です」。最初の段階では反対運動の先頭に立つひとたちの話が予定されていたので、いかんいかんといって中学校の生徒会長、それも女性の生徒会長に、前の晩にばたばた差し替えた。しかも基調は熱烈歓迎。「しっかりと見てもらって、わたしたちの声を聴いてもらってありがとう」。絶対阻止するのではない。その話をみんなでしたら終わるときに厚生省の代表がマイクを貸してくれと。「みなさんのお話はとってもよくわかりました。きちんと報告します」とわざわざ挨拶しましたよ。僕らは大成功って。反対運動はこうあるべきだ。鹿屋と吉永町、水俣、地元の上陽、山川の産廃処分場の反対運動、それぞれ特徴がある。反対運動もみんなそれぞれ面白いですよ。

安定型、管理型の差し止めではわれわれは裁判しなくて勝っている。裁判をしたのは鹿屋が初めてですものね。吉永町も裁判しましたけど、県知事の不許可の防衛戦争ですから、われわれは県知事の応援に駆け付けた。補助参加です。水俣はもう裁判なんてちゃんちゃらおかしい。熊本県が自分でダメだといった。潮谷知事の時。ダメといったというのは正確ではなく、われわれが五〇いくつ疑問点がある、それを業者にしつかり確かめる。業者が答えないのであれば県が自分でわれわれに対して答えろと。答えきれなければ許可してい

けないよねと県に問いかけた。そうしたら県が四〇近くの問題点を業者に答えなさいと。業者は答えられない。そのなかのかなり大きな部分がほんとうに規準どおり処理できるのかという問題です。

もうひとつは事実としてこれまで存している処理施設は現実に処理できているのか。それぞれ処理施設で処理する設備が五段階ぐらいある。その五つの設備についてをそれぞれの最初の原液の成分、第一番目の処理して出てきた液の成分、じゅんぐりに全部数値を示して、最後の施設から放流するところの数値はこれだと一連の流れを全部示すべきだ。業者が出してくるのはひとつひとつの施設ごとに、全体との流れは関係なしに、それぞれの施設ひとつごとに提出して、この施設でこれだけ除去できました、この施設でこれだけ除去できました、というデータを単独のものとして出してくるわけです。それはできません。そのデータに合して処理する量を作っているわけだから。つまり施設ごとに入るものがわかっていてという意味です。入るものがわかっていながらで実験室でやっているわけだから除去できないとそもそも話にならない。さあ、連続技でできますか。最初の施設から最後の施設を出て放流するまで連続した数字を示せと。絶対にできるわけがない。しかしそれをやらないと本当に処理できていることにはならないわけだから業者にやらせろといった。県がそうですね、やれといった。これが決定打になります。業者ができませんと答えた。全体の流れにそって途中の処理

経過の数字を示すことはできないですよ。実験そのものは物理的には可能だけど、経過がきちんと基準値内におさまる結果を示すことなどできるわけではない。いま現実には大抵いい加減な処理水が流されているということです。それぞれの施設が九〇％除去できますと。それはできますよ。わかつてやっているわけだから。問題は、連続して次の段階いくときにいちいち測っているわけではないから。だから連続運転でやれますかという問いかけにいままで答えた裁判例はないと思いますよ。

現在は裁判所は答える必要すら認めない。行政の裁量の一言で拒否して、その問題に立ち入るとわれわれが勝つから裁判所はそれをちゃんと議論させてくれないというのがいまの裁判です。

廃棄物をやっていた一九九〇年代、吉永町もそうだし、鹿屋で勝ったのが二〇〇一年の判例タイムズにのっている。わたしが一番いきいきして取り組んでいた時代ですね。二〇〇〇年にはいつて諫早干拓をやりましたから、諫早も楽しかったですけど、諫早の楽しさはまた違うですね。廃棄物をやっていたときに弁護士としての取り組みでは一番面白かった時代です。危険性とは何かを正面から問うて、裁判所がまがりなりにも答えていた時代ですよ。法律論では、諫早での物権的請求権、権利とは何かというのが面白い。廃棄物では事実問題、危ないという事実とは何かを正面から向かうことができた。われわれはそれを原発でつくりきつてい

ないと思います。

松露と松茸

上陽町（現八女市）は私と高橋弁護士が引き受けた時には七つ申請があつたんですよ。すでに二つ動いていた。二つ動いていた施設が、出鱈目だった。これは住民はたまらないと言つて建設を止めるのに成功した。ところが追いつ返すのに成功してよかったね。全部止めたよね、と言つていたら、反対運動の中心にいた集落でまた処分場建設の計画が出てきた。それだけ山林所有者が困っていたことだと思えますよね。山林の維持管理ができない。持つていたつて自分の代で金になることはまずない。荒れ山にしておくしかならない。荒れ山にしていたら災害が起きたときにどうするのだ。だから少しでも買つてくれるとひとがいたら売りたい。

最近久留米大学で入会の研究会があつた。今、入会の行為自体がなくなっている。山林経営が放棄されている。いまからますます増えてきますね。いい解決策は考えられない。山林経営は個人でやるのは事実上不可能です。入会の主体、地域の共同体が一定の山を管理するのがいいじゃないかなと思いますけど。この研究会のなかで、現実に入会主体が残つていて、入会稼が行われている町では、産廃施設の計画が少なく、現に建設されていないという事実が報告されています。私はそうなんだと納得しています。

松茸がいまとれない。われわれからいうと松露。わたしは新宮の浜辺で育ちまでしたけど、わたしの高校生の時代、松露はとれていたんですよ。虹の松原はもちろん文句なしに松露がとれていた。みなさん、松露饅頭って今の若い方はなんのことかわからないかもしれませんけど、トリュフなみ、高級食材です。われわれの時代は高級食材でもなんでもないですよ。ごく日常的にそこらあたりに転がっている食材です。本当に松露饅頭あれそのまの形です。あれが松林の砂浜にいっぱいあるわけですね。とってきてお吸い物にいれたり、卵とじにしたり、われわれの子ども時代はごく普通にあってとって食べていましたけど、それが高級食材になつていまはお目にかかることすらない。松茸もとんでもない高級食材になりましたよね。昔はたとえば、いまから三〇年前、人吉の山の中で事件があると、帰りにひとかごもらって帰ってました。それぐらいはありましたよ。

なんでなくなったのか一番わかりやすい理由は、管理しないから。松林の松露の話の方がわかりやすい。みんな浜にいつて落ちている松葉がきをして、もって帰るのですよ。なんで松葉がきして持つて帰るかという、風呂釜で薪を燃やしていましたから、追炊きに松葉を燃やすと一番いい。むっちゃくちやくよく燃える。追炊きでちよつと湯がぬるいと燃やしてくれといったら松葉を燃やしていた。だから松林の下は松葉がないのは当たりまえ。雑草はもちろん茂りません。誰も松葉がきをしなくなったから、もちろん松葉が溜まるし、雑

草がはえる。雑草がはえたら松露がでてるわけがない。松茸がそうなんです。山の管理をしないから。松茸がとれるところはちゃんと管理をしているところです。こういう場所では産廃処分場の建設が問題になることはないと思います。里山をどう理解するのか、という問題にもなる。里山というのはどうしても農業と一体です。おじいさんは山に柴刈りに、おばあさんは川に洗濯に、という感じですよ。ようするに馬草をとって、牛馬の飼料にして、薪をとって生活を支える。草を埋めて畑の肥料にする。それがいまだと山林経営の発想なんですよ。営農者の村落共同体、農業のための山、日常生活のための里山ではなくなっている。

共有と総有

法律論として、共有と総有の違いは持ち分があるかないかです。共有は持ち分がある。総有は持ち分がありません。入会は総有です。入会は持ち分がないのは所有権そのものだからなんです。所有権だから持ち分があるわけではない。入会地全部に完全な所有権を構成員一人一人がそれぞれ持っているわけですね。持ち分があったら所有地全体に完全な権利があるわけではないですもんね。持ち分があることになれば、持ち分がある割合は所有権だけど、他人の持ち分のところは、使用するとすれば、用益物権ですもんね。入会是用益物権として理解しようというのがいま全体の、少なくとも民法をつ

くつたときの流れだと理解されているから、私は違うでしょう。用益物権じやありません、所有権そのものなんです。用益物権としての入会権があるとすれば、所有権としての入会権が成立している土地がまずあって、そこに文字通り、入会の形での用益物権としての入会稼をする他のひとたちがあつたかもしれないけれども、そっちが本流ということはないよね、と堅く信じてきたんですけど、かなり強硬にそれは間違いだという反論がありました。

入会には最初から持ち分があります。そっちが本質だという考え方です。私に言わせるとそれだと共有と総有を区別する必要があります。共有だけでいいですもんね。そうすると入会権は所有権だということを強調する意味もあんまりない。総有に意味があるのは、入会行為をおこなっている入会団体、たとえば五〇人なら五〇人が、全員が一つの土地上にそれぞれ完全な所有権をもっていることに意味がある。五〇分の一ずつ持っているのであれば、共有でいい。ごく普通の共有ですもんね。入会は総有とわざわざいう必要がない。総有であつてかつ持ち分があるという法律上の意味がどこにあるのか。私には疑問です。

権利がどっから生じるのかということと同じ議論です。入会はそのそもそもの権利概念の根本ですから。入会権が所有権だというのは、そもそも所有権の発生は入会に決まっている。五〇人が集まっていて、ひとつの物件の上にそれぞれひとつの所有権をもっている。五〇人がみんなそれぞれ自分固有の

支配を確立していて(ゲヴェーレ)、それが所有権として認められる、という所有権をもっているというのが、歴史的な所有権の出発点であり、かつ現在までそうだと理解してきた。産廃処分場の反対運動の基本的な権利は入会権、水利権、漁業権、この三つだ。これはいずれも同じ入会権なのです。水利権、漁業権も入会権です。水に対して水利権で、海だから漁業権です。それでも漁業権の方が陸上の入会権とまったく一緒ですよ。入会行為をおこなう場所が海と山の違いだけです。一定の地域を支配してそこなんらかの成果物を得てくるというのはまったく一緒です。共同で管理するその根源は何かといったら所有権に決まっている。海の中を直接支配する権利ですよ。それは条文として最初から書いてあるわけではない。もちろん用益物権ではないのははっきりしている。わたしはそれを自分の頭のなかで思いついたとは到底思えない。九大の恩師原島先生の教えに従って理解したらこうなるのだよね、と思っている。

「漁業権」というのは入会権である」というのは農水省の監修した教科書でも書いてある。「歴史的には」という注がつくわけですけど。官僚や国はいまは違うといいたいわけですよ。われわれは歴史的にそうだったら、いまもそうでしょう。国が途中で勝手に取り上げることができないでしょう。権利とは何かに結局つながる。水利権もまったく一緒です。水は誰のものか。使う農民のものに決まっているとわれわれは思うのだけれども、いやいや国のものですと。国が権

利を作って国民に与えているのであって、逆にいつでも取り上げることができる、というのが国の考え方です。

筑後大堰

いまから三〇年前、農民からも流水占有料、ようするに水の使用料をとろうと国がいいだしたことがあります。農民が猛反対した。そのときに農民が言ったのが、「雨は国が降らしたのか。違うだろ。国は水に対してもともと権利をもっていないだろう。自分たちが利用している水利施設は自分たちの祖先がつくってきた施設である」といった。農水省としては、権利は国がつくって与えるものだ。だから国がつくって与えたものだということを施設でも形にしたい。農民がもっている権利、とりわけ慣行水利権（まさに農民の事実支配でありゲヴェーレ）は水を奪う立場からは極めて困る。不特定の用量だから慣行水利権を認めると相当多量な流量になるのですね。それが一番正面から議論になったのが筑後大堰です。筑後川の平均流量は毎秒七〇トンから八〇トンぐらいの計算で考えていた。下流域の慣行水利権、これをあお取水といいます。あおというのは淡水という漢字をあてる。筑後川と有明海の天然条件は干満の差が六メートルから七メートルあることです。有明海が富栄養化しない理由のかなり大きな根拠である。普通は浅い海で狭い湾内だと富栄養化するに決まっている。東京湾でも富栄養化してどうにもならない現状

がある。ところが浅い海で閉鎖水域である有明海が富栄養化しないのはなぜか。干満差が六メートル、七メートルあるので、かき混ぜられる。かき混ぜられるから富栄養化しにくい。水質が上と下で層ができない。一体の海になっている。もちろん生物がいつばいいいて、広大な干潟がある。栄養物を食べる生物がいる。その生物を食べる鳥がいる。富栄養化する物質を食べたものがそのままそこで死なれたら困る。生態系の域外に持ち出さないといけない。それがたとえば渡り鳥。それから人間がせつせと持ち出している。いい循環の再生があった。

農業水利の一番のポイントは、水面の水位と田面の水位の差とをいかに克服するかです。筑後川の横に農地があっても筑後川の水は利用できない。農地が水面上より高くて水が引けないから。だから水位差を克服しないとイケないわけですね。それをどうしたら克服できるのか。世界中どこでも同じ議論で、エジプトでアスワンハイダムを造る前にナイル川でどうやって水をあげるか。土地の方が高いところでは、水牛がぐるぐる回って低いナイル川の水をくみあげている。筑後川も五庄屋物語の前はそうやって水をあげていたという描写をしている（常木蓬生『水神』）。やっぱりそうなんです。東南アジアにいくと女の子が水車を踏んで回して水を取り込んでいる。水位差をどうやって克服するか。万国共通の課題です。

筑後川流域は、どこまで潮があがってくるのか。筑後大堰

建設地点河口から二三キロ上流なんです。潮があがってくる限界点です。そのとき全国で造っていた大堰は全部、河口堰です。文字通り河口に作った。筑後大堰の本質は河口堰ではないのか。なぜ、河口堰ではなく二三キロ上流地点に作るのか。それがわれわれの疑問点です。答えは、造る側の学者の論文があったので簡単でした。どこに堰を作れば目的を達成するのかという論文です。取水する立場から言うと淡水取水の量が大きいのが問題なので、淡水取水を退治することが筑後川の水を利用する要であるという論文です。「淡水取水退治」が一番のポイントであるという。

淡水取水というのはどういうことかというと、二三キロ地点まで潮がのぼってくる。新潟水俣病でも原因論争として争われた。塩水がのぼってきて比重が重いから下にはいる。すると塩水にのって淡水が上になる。塩水楔で上流にのぼっていくので、新潟港におかれていた農業の有機水銀が水害で阿賀野川に混入して、工場地点までのぼったというのが会社側の主張です。淡水が塩水の上にとると高度差がいっぺんに解決する。普段なら取水できないのに、満潮の時点で淡水が上に乗って水位が上昇した時点で取水ができるようになる。そのためいつでも取水できない。取水した水を貯めるために下流域は縦横に用水路をはりめぐらしている。はりめぐらしてある用水路の貯水量は二〇〇〇万トンといわれている。つまり二〇〇〇万トン級のダムが左岸右岸、両方にそれぞれひとつずつあることになる。取水できる時に一時に貯めこむのです

から、淡水取水の慣行水利権が毎秒六〇トン、七〇トンになっている。つまり筑後川からそれ以上を取る余分の水はないという結論になるわけです。

問題は新しく許可水利権として認められる水量がないということになる。それは困るということで、筑後川からどうしても水をとりたい。とりわけ、農業用水ではなくて、都市用水と工業用水として水をとりたい。ひとつは都市用水は福岡市が渴水でどうもこうもならないから水がほしいという議論ですね。もうひとつ、より本質的な議論は、工業用水はどこにほしいのか。

周防灘開発計画というのがありまして、周防灘を埋め立て百万都市をつくる。巨大な工業都市をつくるという計画があった。その水を用意しないといけない。筑後川から水を取りたいけど足りない。嘉瀬川からもとる。宮崎の大淀川からもとる。財界のみなさんは考えることはすごいね。大淀川の上流側にダムをつくって水をためる。そのダムからトンネルで、熊本の球磨川の上流のダムに流入させて貯めて、川下りをさせて、あとは勝手に球磨川下流まで流れてくる。そこから北九州までどうやって運ぶのか。導水路のための新しい土地の取得なんていらない。八代から高速道路に乗せるわけです。高速道路の下を通ってくれば、土地の取得がいらない。北九州まで文句なしにいけます。同じ話が阿賀野川でありまして、上流地点でダムをつくる、トンネルを掘って東京側に落とす。尾瀬沼に落としてためる。大変な騒ぎになった。環

境保護者はカンカンに怒った。財界が考えることはすごいです。

筑後大堰は、淡水取水を退治するための、農業用水の合口堰という位置付けです。河口堰ではない。右岸左岸の農業用水を堰に一本化する。農業水量を決めようというて毎秒六〇トンから七〇トン慣行水利権があったものを、左岸、右岸両方合わせて二三トンまで抑え込んだ。つまりそれで新しく取水可能な水量が生み出されたということです。その結果、何が起きるか。農業用水の水利権をそれぞれの地元の土地改良区がもっていた。淡水取水の権利として慣行水利権をもっていたものが合口堰に一本化されることによって、堰の管理者が水利権者になる。すなわち、水資源開発公団が管理者、水利権者です。農民は「施設は俺たちの祖先がつくって俺たちが守ってきた」といつていたが、はいはい、施設は国のものです。だから水も国のものですよ。だいたい水資源開発公団って名前が恥ずかしいですよ。水資源をつくりだしているわけではない。水は一滴も作り出したわけではない。川の水を貯めて取り上げるだけです。それで水資源開発といっちゃはざかしいよねというのが私の意見です。それで水利権は農民から奪われたわけです。筑後大堰建設は農民から水利権を取り上げるためなのです。

五庄屋物語

五庄屋物語の水もすぐ横に筑後川があるにもかかわらず農地に水がとれない。だから荒地だった。それをなんとか美田に変えたいという五庄屋が堰をつくって水を引いた。五庄屋のところの農地へ水を引くためには、はるか上流から自然流下させて水をとってくる。堰をつくる場所とそれから途中水をひいてくる場所では、その水を通すだけで利用できない、土地がとられるひとがみんな反対するわけです。工事の困難は当然のこととして、その調整が難しいわけです。それを実行するためには藩がその気にならないといけない。藩がついに踏み切るわけです。ただし、久留米藩は踏み切るときに、農民の自己責任にして、「五庄屋が責任を持て。だから失敗したらはりつけにするぞ」。五台のはりつけ台を現場に立てるわけですね。村人は五庄屋をはりつけにしてはならないと努力して、ついに成功して完成させ、五台のはりつけ台をみんな燃やすわけです。その村びとたちの将来の繁栄を象徴するかのよう村人の歓呼のなかで、はりつけ台が煙となつて消えていく、という感動的な成功物語として五庄屋物語は終わるわけです。

ところが、熊本農政局が出した『筑後川農業水利史』にその話がでてくる。農水省の役人でも歴史をやる方は偉いなと思う。五庄屋物語は、感動場面で終わったんだけど、現実とは違ったとちゃんと書いている。現実は何が起きたか。荒地が

美田になったのは良かったんだけど、その結果、その村びとに何が起きたのか。過酷な課税です。建設費用の取り立て、できたコメの税金と両方がかかる。村人たちは「たまたま勘弁してくれ」と工事費用をなんとか緩めてくれというのだけれど久留米藩はきかない。それで農民みんなが逃げて、放棄地はまた荒地に戻る。残ったひとたちも困窮してこの地方で一番大きい百姓一揆を起こします。その原因のひとつになります。農水省の『筑後川農業水利史』にきちんと書いてある。私達は技術の階級制という議論をします。技術に階級制があるか。かつて社会主義国の原爆水爆と、資本主義国の原爆水爆は違う。社会主義国、ソ連の原爆水爆はきれいなんだというまじめな議論をしていたという話があります。そういう議論ではなく、技術に階級制があるということは具体的にどういう意味なのか。

結局、長野堰、大石堰をつくった功績によって、五庄屋たちは長野水神社に祀られる。要するに五庄屋は神になった。戦前の修身の教科書で国のために公共事業に取り組む模範的なひとびとを取り上げられる。だけれど長野堰、大石堰ができた結果、誰が得をしたのか。苦勞して造った農民たちではない。重税にあえいで逃げ出したり、百姓一揆をおこす。結局、久留米藩が大儲けしたことははっきりしている。この堰は久留米藩の利益のための堰であって、けっして農民のための堰ではなかった。

では、将来の子孫の繁栄を願った五庄屋や村びとたちは無

駄なことをしたのか。違うというのが私の意見です。結局、堰の利益を享受したのは、戦後の農地解放によって自らが耕作する田畑を自らのものとし、長野堰、大石堰の水を自らのものとして使うことが可能となった子孫たち、農民たちが利益を享受している。堰というのは物理的存在としては造ったときから今まで何の変化もない。だけれど誰のための堰かというのはそのときの利用主体、利用権利者が誰か、利益主体が誰なのかによって決まる。これが技術の階級制だと理解しています。大石堰、長野堰は、農民が土地を自分のものとして、水を自分のものとして使用できる権利が確立できたとき、農地解放ですよ、まさに自らの堰、自らの水利権として利益を享受できるようになった。

だから筑後大堰もこれを誰が何のために利用するかによつて、国民のものともなり、国民に敵対するものにもなるのですよ、と私は筑後大堰の裁判で弁論した。筑後大堰が農民から水を奪う手段として利用されている。まさに農民にとつては敵対物となり、権利を奪う手段として利用されている。だけれど、いざれ農民がまた自分たちの手に筑後川の水の管理権を取り戻せば自分たちのものになる。漁民、とりわけ有明のノリ漁民にとつても同じ話です。筑後大堰によって下流、有明海に流れ込む水を奪われたために、有明海異変といわれる異常な状況が生じています。有明海は、筑後大堰建設によって、じりじり殺されているのです。そしてその状況にとどめを刺すのが諫早干拓事業なのだと思います。そして前提とし

ての筑後川の水そのものが、水源地となる上流で、産廃処理施設建設によって、その出発点から汚染されているという現実が存していることを、強調して指摘しておきたいのです。だからその後の地域住民、農民、漁民は筑後川の水を自らの水として、権利として活用できるようにたたかい続けているのだと思います。「よみがえれ！有明訴訟」もそのひとつなのです。

生産現場の話

廃棄物処分場をめぐる問題は、ゴミの生産と処理をどう考えるかという根本の哲学問題がある。そしてその処理をどう考えるか。そして処分場がまともな施設といえるのかという議論になる。もともとの一番の出発点のゴミの生産をどう考えるのかという哲学が日本にないものだからいまの大混乱になると考えています。

倉本聰は、ドラマで炭焼きで木を切ったらその場にまた植林していくのを教えている。廃棄物の捨て場、最終処分場で、「北の国から」の主人公の純くんは、市の管理する廃棄物処分場のゴミを集めて回る市の職員になる。まだ使えるものがいっぱい捨ててある。恋人と一緒にいろんなものを拾ってくる。倉本聰は、家も廃棄物でつくる。純くんのお父さんがつくった家がある。ゴミとして捨てるのがおかしいよね、という問題提起は倉本聰はしっかりした。倉本聰にしては問題意

識が不十分だよねと私が疑問に思うのは、あえてそれが間違いいとはいいませんけど、それでも消費の問題、ゴミの捨て方の問題と考えて生産の問題に踏み込まなければ物事は根本的には解決しない。久留米市の廃棄物処分場反対というのに対して、市長が「あなたたちもゴミを出すでしょう」といった。それに対する直接の反論はない。ゴミは間違いなく出すわけです。

ただ、哲学の違いが何を生むのかということはわたしも本質的に反論できる。ドイツと日本のものの考え方の決定的な違いですけど、ドイツのものの考え方は「そもそもゴミになるものをつくらない」。だからベントが一九七〇年代から八〇年代に入るときだと思えますけど、ベントが日本で一斉にコマーシャルを流した。その時の最初のコマーシャルをわたしはいまでもよく覚えていますが、「ベントには捨てるものがあります。廃車にするときには部品はすべてリユースします」。「捨てる部品がありません」というこの宣伝文句の重大さ偉大さが日本国民にはまったく理解できなかった。もちろん、わたしも理解できなかった。いかにそれが大変で、かつ重大なことなのか。それが宣伝文句になるということが理解できない。だからあつという間にこの宣伝やめましたけど。ドイツ哲学の神髄なんだと思います。製造現場で商品としてゴミが出るものはつくらない。フライブルグに行きましたら、反対運動の中心メンバーが話をしてくれました。毎年、一番良い商品と一番悪い商品を選ぶ。いずれも日本の商品だっ

た。一番良い商品は、京セラの商品です。ゴミを出さない製品をつくっている。一番悪いのがたまごっち。何の意味もない。しかもプラスチックは永久にゴミが残る。というのがドイツの発想ですね。燃やすのは犯罪です。

日本はゴミ捨て場がなくなったのでしょうかない、なんでもすべて燃やせですもんね。正反対のものの考え方になって、ドイツはなぜ燃やさなくていいのか。ひとつは自然条件が違う。ドイツは自然の捨て場がある。昔、山の中で塩を切り出した廃坑がある。だからそこに捨てればいい。絶対安全に決まっています。ここに貯めておいて将来処分できるようにしたら処分する。核廃棄物もドイツの塩の廃坑に捨てるのでもいい。とりあえず安全な捨て場がそもそもあるというの違うのだけど、より根本はゴミをつくらないという哲学です。

ゴミ問題の解決は消費の段階ではないということですね。倉本聰は消費の段階でなんでも捨てるのがおかしいという問題提起をした。それでも捨てるゴミをできるだけ少なくしてできるだけゼロにしたい。生産現場で考えない問題解決にはなりませんよ、という哲学を倉本聰が持っているけど書けなかったのか、そもそもそういう哲学を身に付けていないのか。ほかのところでも倉本聰は権力に対する怒りをいろいろドラマで書いている、最近の「やすらぎの里」でも戦争に対する問題提起を充分しましたよ。山で自活して生き抜いて徴兵拒否をした。ところで富良野のプリンスホテルにあるGod's Bar。倉本聰の企画したバーだそうです。権力

に対する怒りというか、財界に対する怒りはここにはないのかと思っちゃうのだけど。行ってきましたけど。

いま廃棄物問題を議論するときに、そもそもゴミを作らないようにする、生産現場でそもそも最初からつくるときに問題にするような発想にはならない。財界、国がならせない。いま産廃問題やっていると称するひとたちも「これは生産現場の問題なんですよ」という発想がほとんど語れないとわたしは思いますよ。もっぱら消費の段階、製品ができた後処理の問題として考えている。だから、原発ゴミが出ることに對する怒りの声はあがるけれど、原発をつくるときになぜゴミの処理を考えていなかったのかという怒りの声は小さいように思えます。誰が考えてもつくるときに捨てる方を考えておかないと。いまになつても捨てる方すら確立できない。これを確立しないで原発をつくるのはけしからんというのが、反対運動の主要な流れにもならないですね。原発反対運動のなかでも、核に汚染された廃棄物処理の方法が確立していないまま設置を許していることが反対運動の主要理由としてはあがつてこない。産廃問題に取り組んでいる専門家の方も処理技術については専門家であっても、そもそもゴミをつくらないという専門家はほとんどいないのではないですかね。そもそもゴミを出さない生産のありようを議論する場面をなかなか見ることができません。

ドイツはそっちが本流だと思います。ドイツでは原発をつくらない決めた専門家たちは、中心は哲学、倫理の専門家

たちですものね。技術者屋さんではない。その差が重要だと思えますよ。日本で原発はダメなんだという哲学倫理の問題にはならない。そこはさすがだと思いますね。産廃の基本的問題点だと思います。

技術的な問題は、一番は廃水の処理ができるのか。漏らさない施設はかなりのところまでいったと思いますよ。高良内では問題を起こさない。そもその問題は「処理して流しています」というけど本当に処理できているのですか。できていないに決まっている。すくなくとも環境ホルモンについてはされてない。環境ホルモンはいま議論下火ですから、なんとか成り立っているけど、環境ホルモンの議論が世界的に確立したら、燃やしたら本当に犯罪ですものね。

プラスチック

いまようやくプラスチックは使用してはいけないという考え方が確立している。わたしが東京で二〇年以上前にペットボトルを燃えるゴミのコーナーに捨てたら、厳しい批判を受けた。「よう廃棄物の専門家といつとられるな」と。「燃やしてはいけないゴミだろうが」と。「ごめんごめん、福岡では燃やすゴミのコーナーに捨てて」と笑ったけど、いまは東京ではプラスチックは燃やすゴミになっている。

なんでプラスチックを燃やすのか。もちろん捨て場がないからだが、それでも東南アジアでも買ったところがない

さんある。売ろうと思えば売って売れないことはないように思えます。とにかく燃やすといったのは、ひとつは焼却施設で燃やすゴミが少ないから。もうひとつは可燃材としてよく燃えるから。高カロリーなんです。だからプラスチックを燃やしたらわざわざ可燃材を加えなくていい。だから施設管理の点からいけば燃やしたい。

ただこれは犯罪であるといまようやく声があがりはじめました。海の生物が多量に飲み込んでいるというので問題になりましたけど、やっとなじめな感じで大気中のプラスチックも危ないというのが、いま恐る恐るという感じできてはじめています。私から言うと、大気中のプラスチックゴミの方が危ない。もちろんプラスチックの粉塵もありますけど、燃やした方の危険性がいまの日本でははるかに大きいと思います。

問題になっているPM2.5という一定の粒子の大きさですが、じん肺法が成立する前と同じ議論をしているように思えます。一定の大きさの粒子は危ない、という考え方です。しかしそれをわかりやすい言葉でいうと、危ない粒子と危なくない粒子がある、ということになります。じん肺の裁判で国の学者がでてきて、「危ない粉塵と危なくない粉塵があります」と。そんなバカな、と私たちは怒りました。PM2.5の議論はそのレベルの議論のように思えます。そうではなくどの大きさでも粒子は全部危ないに決まっています。燃やすなんていうのは論外です。特にプラスチックを燃やしてはい

けない。だから東京都だって以前は燃やしていけないものだった。それを処理の必要に応じて変更するところが日本流です。

これは端的に捨て方の問題ではないという議論として理解しやすいですね。というのはプラスチックは変化しないから。捨て方を工夫したってどうしようもない。燃やすしかない、しかし燃やしたらいけないという議論にならざるをえませんから。そうするとそもそも使わせない。プラスチックはうまくいけば生産現場の議論にいく。その場合製造者側はただちに反撃に移りますから、それが成功するかどうか。ただ世界的に危ないということになっていますから、日本国内で決着がつく問題ではない。わたしはかなり楽観視している。生産現場に踏み込むという話の突破口になる。

八丁島の焼却施設もプラスチック処理を問題にしたが、裁判所が話を聞く気がない。残念でしたけどね。もともと久留米市がプラスチックゴミの別途処理をするようにしていた。ところが、喉元過ぎて今度は八丁島に新しい施設をつくることになったら、燃やすゴミの量が不足していますから、プラスチックを燃やさないとしょうがない。プラスチックのゴミ量が大きいから、昔は一応分別はしていたけど、いまはもうプラスチックゴミは本気で分別はしませんよね。どうせ燃やすんだから。

廃棄物と原発

廃棄物の議論というのは、そのまま原発の議論に直結しますね。ゴミの問題は生産現場を規制しないかぎり解決はつかない。根本的解決にはならない。そうなるのはやっぱり核だと思えますよ。原発の核汚染廃棄物の処分をめぐって、いままでの廃棄物の処理のルールよりも緩やかな規準にするんですからね。緩やかにしていいの。本当はより厳しくしないといけないのに。放射性物質を普通のゴミの基準より緩い基準で捨てていいと。だけどそうしないと福島事故の解決はつかない。一か所に集中すると問題になるから、だから日本中に分散してばらまく。そのために補助金をつけてばらまいたわけですね。手を挙げた自治体と手をあげない自治体があって、手を挙げた自治体はようするに核に汚染された廃棄物を受け入れる、処理すると言ったところが補助金をもらった。住民がびっくりして反対運動が強まったためにあわてて手を下した自治体もありましたけど。いま、こっそり実行に移そうとしている。もう何年も先の話ではないですものね。

福島で今タンクに溜めている汚染水は流すに決まっている。最初からそう決めている。最初からその方針だったのは明らかだと思います。いきなりはいえないから、「限度が来ました。流しますよ」。環境大臣が辞め際になっていった。あれは規定方針で東電は最初から海に流す方針です。水は流すことは決まっている。あと汚染度が低いと思われるものを

日本中にばらまぐ。北九州は受け入れている。そしてだんだん捨てる濃度が高くなっていく。

高良内の廃棄物の処分場の建設とき、私は市役所の隣の公園にビルを建てろといった。そこを廃棄物の捨て場にしろと。これが一番簡単な解決の方法だと市長にいったことがある。あちこちにばらまいて捨てるのが一番悪いと思います。

遮断型処分場

遮断型について話していないのは、そもそもどこにあるのかさきよく知らない。鹿児島で鹿屋の反対運動をやったとき、管理型処分場が鹿児島県にひとつもないわけですよ。だからつくらないといけないと鹿児島県は力説したわけですね。いまでもひとつもない状況は本質的には変わっていないのじやないかな。わたしが「廃棄物処分は現地主義で各自自治体が自分のところは自分で責任をもとうね」といつてきたはず。県境を越えるのは原則やめようね」と。県境を越えるというのは大変なことなんです。鹿児島県の担当者は、管理型処分場に捨てられるべきゴミはいまどこに捨てているかわかっていないとおかしいよね。いくらそう聞いてもこたえませんよ。管理型処分場に捨てるべきものが安定型に捨てられているってことでしょう。あるいは県境を越えているのであればその先を明示してほしい。いま根本的に状況は変わりました。全部燃やすから。

官僚は作文したら世の中は自分が書いた作文通りに動く、信じる事ができる能力をもったひとたちだと思えます。オーウェルの『一九八四年』の世界です。難しいのは自分も現に騙されちゃったらいけないから自分の嘘を信じる能力と、しかしそれは嘘であるということを理解している能力と矛盾なくもたないといけない。『一九八四年』で描かれた官僚の姿ですよ。いま安倍さんのもとでは信じたふりをして、本気で信じているのではないか。本当の姿は知りたくない。それが文書偽造ですよ。『一九八四年』でも毎日文書偽造して歴史を書き換えていますけど、あれとはレベルが違いますね。今は真実は何か目をつぶって見ないふりをして現実を知らない。質的に違う。『一九八四年』の官僚たちはレベルがむちゃくちゃ高い官僚たちですよ。

遮断型に捨てないといけない医療廃棄物はどこに捨てられているのか。本当に知りたいですよ。くどいけどいまは燃やすからそれで一応の解決になっている。その前は どうしていたのか。宮本信子の夫である伊丹十三は、次の新作の準備にかかっていた。それが廃棄物、それも医療廃棄物です。それを聞いてわれわれは色めき立った。遮断型に捨てられるべき廃棄物がどこでどうなっているのか。これは面白い。楽しみにしていた。そして彼は突然死んだ。自殺といわれている。新作をつくるという取材をやって、推理小説風というと触れてはいけないところに触れてしまったのではないか。まったく何の根拠もない話ですけど。ただそういう話がながれて

もおかしくない医療廃棄物処理の状況であった。それがいま福島原発で問題になっている。核汚染廃棄物は遮断型に捨てられないでしょう。いまでている話は、本当にきちんとやりたければ、チェルノブイリの石棺、本当に文字通り遮断型にするしかないといわれている。

遮断型の法的概念はきわめて明確ですよ。管理型は、有害物質でも処理可能なものは処理して、ある一定の安全度に入ったら、捨てていい。処理できないものは遮断型ですよ。医療廃棄物は安全に処理できるとはいえるわけがない。特に問題になったのはHIVですよ。住民みんな調べているわけではないから、汚染されているかどうかわからない。大丈夫とはいえないわけだから。その割には遮断型の処分場はどこにあるのか。よくわからないほど少ない。私は実際問題として遮断型に捨てている例をしらなかつた。問題になった例はある。宗像の焼却施設反対運動で、それまで捨てているところを掘ったら医療廃棄物がでてきた。大問題になった。高良内の反対運動のときも、満杯になった前の処分場でも医療廃棄物がいつばいでてきた。捨て場がない。今ある処分場に捨てる他ないわけです。

日弁連が安定型をやめろという提言したのは、管理型に捨てられるべきものを安定型に捨てているからです。安定型に捨てていいものなんて本当はない。だから安定型処分場はなくすべきだと。全部、管理型と遮断型にすべきだと。しかし、遮断型にすることが不可能なものだから燃やす。燃やすとい

うのは二つ意味があつて、ひとつは廃棄物行政が抱えている安定型、管理型、遮断型の無意味さというか、概念上はすつきりしているが、実際問題としては実行できるわけがない。しかもわれわれが管理型を止めた。鹿屋で勝った決定的意味をもつたのは、処理できるというけれど処理できませんよ、ということですよ。安定型の議論は、安定型五品目以外が捨ててある。非常に明快でわかりやすい。安定型は無条件で止まるようになった。処理できないものはまず捨ててはいけない。まだ未処理の状態に捨てている場合、外に漏らしてはならない。だから外に出すときにはきちんと処理するんですよ。未処理のものが外に漏れるかどうかという議論をしてきた。必ず漏れるという議論をしてきた。ところがわれわれが鹿屋でやった理屈は、処理できるという処理方法は、うそっぱちだった。魔法の薬があるわけではない。廃棄物は性質が均一のものではない。むしろくちやに高い処理能力が必要となる。そんなことができるわけではない。裁判長はそうだと認める判決を書いた。水俣の施設でも完全に処理することではできないという議論になった。行政は困った。それで燃やせばいいという話になる。遮断型もいらない。しかし放射能は燃やせばいいという理屈にはなかなかならなかった。原発だけは解決できないのです。

（続く）